令和元年１１月１２日

松阪市議会議長
大平　勇様

報告書

無所属の会・みらい
海住恒幸

第１５回地域医療政策セミナー参加報告

（主催　全国自治体病院経営都市議会協議会）
開催日時　令和元年１１月１日（金）午後１時～午後４時４０分
場所　都市センターホテル３階コスモスホール
（東京都千代田区平河町２丁目）

■プログラム　２つの講演
（１）八尾市立病院総長　星田四朗氏　「“患者流出＞流入”医療圏におけるイノベーション～目指すべき方向の明確化と PFI の活用～」
（２）医療法人社団悠翔会理事長　佐々木淳氏　「超高齢社会に求められる地域医療のかたち」

■それぞれの講演の要旨
（１）　八尾市立病院の場合（星田四朗氏）
八尾市立病院は、縦に長い大阪府の中央部の東端に位置する自治体（人口約２６万６千人）が設置する急性期病院で、隣接市などの公立ないしは公的病院、民間病院との競争が激しく、患者の流入よりも流出の多い状況が続いていた。平成２１年度以前は赤字が続いていた。そんな中、平成１５年より PFI による事業手法を採り入れるなどし、２２年以降、黒字に転じた。ただ、今回は、PFI 手法そのものよりも、診療科目の重点化（差別化）などにより病床稼働率を上げた、進むべき方向を明確にした病院運営の姿に重きを置いた報告だった。同病院では急性期診療においてもともと強かったというがん診療に加え、弱かった循環器診療を強化したことで病床稼働率は平成２３年度には８８・３％だっ

たのが平成３０年度には９７・５％めざましく上昇した。また、「断らない救急」を目標に掲げ、公立病院としての意義づけを図った。これとは別に、周産期や小児医療の増床を図るなど、医療戦略面における積極性を見せている。

（２）医療法人社団悠翔会の取り組み事例（佐々木淳氏）

高齢者の在宅医療を専門に手掛ける多数の医師、看護師等の医療スタッフたちの集合体のような組織（ファーム）である。佐々木氏は、一般の病院の臨床経験を経たのち、医師として自ら取り組むべき医療のビジョンを在宅医療という形の中に具体化させている。かれのビジョンとは、体の機能が損なわれても、在宅医療を通して、本人が選択した生活人生を最後まで生き切る環境をつくることにあるようだ。身体機能が衰弱しても生活できる機能を生かし、最後までその人の人生を生き切ることができるようサポートする医療を手掛けている。損なわれた身体機能を回復することに病院の使命があるとするなら、人生・生活の部分が占める社会的機能を支えるのがケアの力である。病院に入院することで人生（生活）の継続性が失われることが人生の価値の喪失になるので、入院を減らすことで生活の質を確保できる体制の構築を目指した努力が行われている。

■所感

２つの興味深い事例を拝聴した。

八尾市立病院の事例は、PFI を別にしても多分に松阪市民病院と類似事例として比較をしやすい。八尾市立病院は循環器など利益の上がる急性期医療を追求し激しく他病院と競争しているようだが、「断らない救急」であるとか、周産期、小児科医療に地域が必要としている医療としてとらえているところに市場性を見る目ともに公立病院としての使命感も持って取り組んでいるところに安心した。このように同病院の運営は、どん欲までに目指すべき病院像が明らかであるに反して、松阪市民病院は経営的黒字の維持という目標と輪番制の維持という消極的な動機以外に、公立病院として地域のために何を果たしたいのかが相変わらず姿、形が見えないままである。

医療法人社団悠翔会というより、理事長である佐々木淳氏の取り組みは、たいへんに刺激的にしてアグレッシブである。かれの個人的な才が本格的な高齢社会の渦中に入ろうとしている日本の医療にモデルを示そうとしている。とても面白い。かれのような戦略を持った医師とそれを支えるスタッフからなる医療チームが松阪にもあってくれることを望むが、かれの個人的な才能に基づいた医療のようで急速な広がりはまだまだ無理があるようには思う。しかし、か

れがアグレッシブに主張する医療のあり方が真実性を持つならば、そこにこれからますます深刻化する地域の医療の現実を変えていく可能性があるようで勇気づけられる。

これら２つの事例は両極端であるようで、実は共通する点がある。それぞれ自分のフィールドである地域でどのような医療を構築していこうとするビジョンを描き、それを実現するための頭脳と戦略を持って実現に至った行動力である。どうも体制順応に慣れすぎた松阪市においては新しいモデルを構築していこうとする勇気は欠けるようである。おそらく、国や県によって標準化されたモデルを待つ気持ちが為政者の中にも強いとは想像する。しかし、地域の中に自ら先んじて構築していこうというどん欲さをこれからの時代は必要としているように思う。

わたしとしては、今回示された２つの事例を講演で聴くだけでは緒にも就かないので、一つひとつの事例を研究していかなければならないと考えている。そんなきっかけとなったセミナーである。

以上